

大

空

窪

岡

穂

田

信

論

岩波
書店

窪田 空穂 大岡 信 論

岩波
書店

窪田空穂論

一九八七年九月二十九日 第一刷発行 ©

定価一八〇〇円

著者 大岡 信おおおかの しのぶ

発行者 緑川 亨

発行所 株式会社 岩波書店
〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五号

電話 〇三・六五・四二二〇
振替 東京六二六三〇〇

印刷・法令印刷 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-000436-0

目次

I

窪田空穂との出会い	3
-----------	---

空穂の世界——序説的な概観	10
---------------	----

II

窪田空穂の出発	37
---------	----

空穂の受洗と初期詩歌	66
------------	----

空穂歌論の構造	101
---------	-----

空穂の古典批評	131
---------	-----

空穂の長歌「捕虜の死」と大戦……………151

長歌に見る歌人空穂の本質……………210

Ⅲ

空穂秀歌選 一——長歌十五首……………233

空穂秀歌選 二——短歌百首……………242

あとがき……………261

I

窪田空穂との出会い

本を読んでその影響を受けるということは誰にもたえずあることだが、影響にもいろいろな段階があつて一概には語れない。しかし、若いころに読む本というものは、その時当人は気がつかなくても、のちになつて顧みると、決定的な影響を受けている場合がある。若いときは頭脳がいわばまだ大して水を吸いこんでいない海綿のような状態にあるので、素直に勢いよく吸いこんでしまうからであらう。私にもそういう種類の本はあつた。そのひとつに、創元社百花文庫の一冊として出た窪田空穂くぼたうつぼの『和泉式部』(昭和二十二年)がある。

私は一九四七(昭二二)年春に旧制高校に入った。十六歳だった。戦後二年目で、社会は混乱と窮乏のなかにあつた。日本という国が全体としてひどくみすばらしい状態になつていたから、私のような生意気盛りの年齢にある小僧っ子は、日本の古典文学などをじっくり読もうという殊勝な気持には、どう転んでもなれないのだった。あまつさえ、それまで何年にもわたつてとだえて

いた諸国との交流が細々ながら再開され、欧米の思想、文学の大波小波がどっと打ち寄せてきた時期で、その勢いは年少の人間にはわけても強烈な刺激だった。私ももちろんその波を受けざるを得なかったから、まずはフランス文学をがむしゃらに学んでやろう、それにはボードレール、ランボーから始める、と、辞書を引き引き、前途茫洋として定かならぬ泥んこ道を歩きはじめた。当然のことに、この道ははてしなかった。それでもえらく面白そうではあった。面白そうではあったが、行きつく先は少しも見えなかった。私はただ、自分が詩を作る上で、外国語を読み、場合によっては訳も試みることに、どう疑いようもなく今は必要だという予感だけをもっていた。ところが、その一方で私は日本の古典文学、とくに詩歌の魅力に全く眼をつぶり通すということができなかった。理由はたぶんいくつかある。

その一に、私が歌人を父親に持つという偶然から、少年時代以来短歌というものにいわば肌身を接して育ったという事実があった。のみならず、戦後中学三年から四年にかけて、仲間と語らって同人誌を出したとき、私がまず最初に作ったのは数十首の短歌だった。

その二に、高等学校受験のために読んだ一冊の参考書の影響がたぶんあった。塚本哲三の『国文解釈法』という、大正五年以来おそらく百版以上も版を重ねたであろう参考書である。私は父親が中学時代に使ったこの本を受けついで、古文の受験勉強はこれ一冊ですませてしまった——当時の出版事情では、幸いなことに、受験生をひたすら無力感でうちのめす膨大な量を誇るあれ

らの受験参考書はろくに出版されていなかったのである。塚本氏の参考書は実によく出来ていたと思う。私は問題文としてとられた古文の文例のひとつひとつを愛読した。塚本氏の説明を読んで、急に頭がよくなったようにさえ思った。氏の説明が上等だったのである。私はこの受験参考書一冊を通じて、日本の古い時代の文章もなかなか面白いなという感触を持ったのだった。

その三に、『古事記』をたまたま父親の書齋にあった文庫本形式の日本古典全集刊行会本で読みかじり、古代の女性たちの月一回の生理現象までそこには書かれているのにひそかに驚いたのがきっかけで、岩波文庫の『竹取物語』『伊勢物語』のような本をも中学時代の終りごろに読みはじめ、その文章の微細な点はよくはわからないながらも、読み通してしまったことに氣をよくした思い出があった。『伊勢』の場合など、いくつかのエピソードを、堀辰雄にならって短篇小説にしてみたなどと思ったこともあった。

その四に、高等学校の寮に入ってから、万年床のわきの机に『万葉集』と『新古今和歌集』とを置いていたため——こちらは岩波文庫にかつて存在した教科書版のもので、そこに印刷されている本文はそっくり文庫本のもと同じ版面ながら、本の判型はずっと大きく、四六版ほどのものとなっていて、つまり周囲がゆったりと余白になっているまことに感じのいいものだった——、アーペーサーを習うかたわらそれらを開いてみては、一人で感心する折々があった。自分の書いた詩のサブタイトルとして、藤原定家の歌を置くようなこともした。

その五に……いや、あとは省略することにしよう。

そういう時期に、私は九十ページそこそこの小冊子、すなわち空穂の『和泉式部』に出会ったのである。

「十月十一日 於白木屋」と書きこんであるから、同書の刊行直後の昭和二十二年十月に買ったものだ。仙花紙のざらざらな紙の、まことに薄っぺらなこの小冊子は、空穂がその数年前に出した『中世和歌研究』（砂子屋書房）の一章を新たに独立させて単行本としたものだった。『中世和歌研究』なら、空穂を師とする私の父親の書棚にもあったが、当時私がそんなことに気づくわけもない。ただ、私は空穂先生に旧制高校入学時の保証人になっていたことだってある、その意味ではある種の親しみをこの大先輩に抱いていた。空穂の歌についても、父親が主宰誌「菩提樹」に戦中から戦後にかけて書き続けていた「窪田空穂全歌集の鑑賞」という膨大な文章によって、私は同年輩の少年たちの中では、あえて威張って言えば、日本中で一番よく空穂の歌に通じていたはずである。

日本橋の白木屋デパート（今は東急デパート）の書籍部でこの本を買ったのは、あるいは寮の仲間と一緒にあの辺の会社へアルバイトにでも行った帰りだったのかもしれない。読みはじめて、私は空穂が和泉式部のうまれ、育ち、ひととなり、また平安朝最盛時の男女関係の特質を説き、「様好さ」「あはれさ」を追求する同時代の「芸術化」された男女関係の中で、一人とび離れて

異様な恋愛行動をせずにいらなかった和泉の個性を語ってゆく筆致の、力強さと明晰さに、誇張でなく、震撼された。

古人を語ってこれほどにも一社会の特質を鮮やかに浮彫りし、一人の女性の生の息吹き、その苦しみや倦怠、嘆きや深沈たる人生観察の重みを、さながら生ける隣人を語るがごとくに語りうるものか、という驚きがあった。

和泉式部の歌の多くは難解である。それは彼女が、世上一般の規範となっている和歌の作り方にとらわれずに作っている場合が多いからである。ある程度平安朝の和歌を読んだ上で和泉の歌を読んでも、彼女は相変らず難解だ、という思いを私は持っている。空穂は今言った小冊子のいわば本論の部分で、総計百十一首の和泉の歌を取上げて鑑賞し、批評しているが、私はそれを読みつつ、しばしば舌を捲き、膝をうった。歌だけ読んでは何のことやらわからぬようなものが、空穂の簡潔な筆の進むにつれて、みるみる和泉式部の心の内景を深く、また広く開いてみせるものに変ってゆくのをみるのは驚きだった。

空穂は、古典といわれる和歌の面白さを教えると同時に、そういうものを解明してゆく空穂自身の批評の鋭さとの確さによって、古典批評というものの面白さを教えてくれたのだった。鑑賞というものが批評の精粹である場合もあるのだ、ということをも教えてくれたのだった。

これが私にとっての、いわば本格的な意味での最初の空穂との出会いであった。私的な関係に

あつては、すでに書いたように旧制高校入学時に保証人になっていただいたのをはじめとして、大学へ入る時も、新聞社に入社する時も、雑司ヶ谷へ出かけてはハンコをついていたいたし、もっと重要な一身上の問題についても、困ると最後には雑司ヶ谷のお宅への坂を登った。頼りになる大先生、というよりも、人生の大先達であり、ふしぎなことに私にとってはいわばお祖父さんのようにさえ思われるようなところさえある存在だった。

けれども、この人の前で甘ったれたことを言うことは一切できなかった。峻厳な批評精神の塊りが、いつも微笑を浮かべながら、聞き上手のていをしてゆったり目の前に坐っていたからである。

私はこの人を単なる短歌界の長老と思ったことは一度もなかったが、空穂の短歌はそれだけをとっても、精神的存在としての人間の幅の広さと奥行きの深さというものを存分に示す稀少な短歌、日本の短歌の歴史ではむしろまことに数少ない「認識者」の短歌であることを文句なしに示すものとして、短歌史上の偉観であると思っている。その点では、もはや私的な親近感など、ものの数でもない。

本書はそのような立場にある者が、空穂の創造的生涯の内的構造を、可能な限り接近した所から明らかにしてみようとするものである。接近が同時に広い視野への還元作用でもありうるようにつとめねばならないが、とにかくにも対象は九十年を生きたとびきり緻密な頭脳と感情の人

である。私の論点はおのずと私の関心のあり方を反映して限られたものにならざるを得ないだろうが、それにはそれで陰影がはつきりするという利点もあるだろうと思う。

空穂の世界——序説的な概観

一

窪田空穂の全集（角川書店）は全二十八巻、および遺歌集『清明の節』や短歌・散文の補遺に各種資料を併せた別冊一卷の二十九巻から成る。全巻A5判六百ページ前後の大冊で、散文は二段組みだが、これでもなお収録洩れのものはいくつある。

当初の全集刊行計画では全二十五巻で完結の予定だったが、到底それでは間に合わないことが明らかになり、巻数が右のようにふえたのである。昭和四十年二月から刊行が開始され、四十三年三月に全二十九巻がめでたく完結したが、空穂自身は奇しくも当初予定の二十五冊が刊行され終ったところで、四十二年四月に発病、心臓衰弱のため同月十二日死去した。満九十歳に二ヵ月ほど足らぬ長寿を全うしたわけである。その死は全生涯を完全に生き尽した人の、地平線の彼方への静かなもう一步といった感じのもので、実をいえば、私は空穂の逝去を知ったとき、悲しみ

よりは一層深いところで、贅嘆のおもいに浸ったのであった。九十年を生きて、これほどにも老耄と無縁だった人を、私はほとんど他に知らない。死の四ヵ月ほど前にお訪ねしたとき、空穂は再び起つことのない病床に臥せておられたが、「おいおい、君は空穂の全集を少しは読んでいるかい」というおどけた質問に始まって、大学問題(当時私のつとめていた大学では学費値上げをめぐる学生のストの最中だった)や、少年時代に通学した信州松本の開智学校の、日本近代建築史上にのこる歴史的な校舎建築についての詳しい説明など、いつもながらの驚くべき記憶力で、小半刻ばかり話されたのだった。空穂の肉体は、私にもただちに感じとられたほどの著しい衰えを示していたが、頭脳は依然としてまったく精密に運動していた。

窪田空穂の達成したもの、というとき、私は空穂の著作やその文学史上の位置を思うよりは、むしろ、ひとつの精神がその不断の運動を通じて至り得た、ある晴朗、澄明な有機的統一の稀れな達成をまず思う。空穂の業績は、短歌とか小説とか学問上の著作とか批評とかのそれぞれによって測られるものであると同時に、それ以上に、一人の人間がその精神の霊液を、最後の一滴まで完全に生かしきって生きた、その精神的行為そのものによって、測られねばならないだろう。

空穂は、短歌その他の作品をつくる以上に、いわば精神そのものを作品としてつくりあげながら生きた人である。精神を作品としてつくりあげるといふことは、言いかえると、抵抗の対象、克服の対象、達成の対象を、自らの外にもつのではなく、内にもつということである。空穂が

「文庫」「明星」への投稿青年だった時代からずっと、いかなる流派にも属さず、独りの道を歩んできたことは、その端的なあらわれであって、これは空穂が、外部よりも自分自身の内側に一層多くの働きかけるべき素材と領域をもっていたからにはかならない。このことは、空穂の文学史的、短歌史的な位置づけの問題とは、おのずから異なる問題である。

精神が外部にむけて作りだしたものの歴史、すなわち文学史と、精神そのものを無限定な、変幻極まりない作品として不断に新たに作りあげてゆく精神の働きの歴史、すなわち、創造行為そのものの歴史とは、ある点までは相関関係にあるが、全面的に一致するものではない。両者の方向や次元が異なるからである。交錯はするが、重なり合うものではないからである。

ところで、精神が自分自身を対象としてどのようにみずからを変えていこうと、そこで生じる変化は、ちょっと妙な言い方にきこえるかもしれないが、変化そのものが常態であると言えるような性質の変化であろう。なぜなら、精神にとっては不断に変化することこそ、精神の統一性の証しにはかならないからである。変化しない精神とは、病んだ、あるいはすでに死んだ精神である。したがって、人はある精神の働きそのものを考察の対象とするやいなや、不断に変化してやまない動^き動的を相手に矢を射ようとする射手にならざるを得ない。しかも、ここでは、揺れ幅の広いほど、精神の精神たるゆえんを示すものであってみれば、その的の、全体としての位置を定めるということは、的の揺れ方自体を種々の観点から眺めることのおもしろさにくらべ